

高齢者の交通モード別の安全行動等に関する調査研究（付録）（平成16年度）

本調査研究の本編では、高齢者の安全行動等に関する走行実験、心身特性検査、意識調査等の結果を総合的に分析した。一方、被験者からは「自分の検査・評価結果を知りたい」といった声が多く寄せられたため、実験結果を『安全運転診断評価表』として個人別にとりまとめ、アンケートとともに被験者へ直接送付して、今後における高齢者の安全運転診断評価の方向性について検討した。

- ① 『安全運転診断評価表』として個人別に身体機能、基礎運転操作、模擬市街路走行、総合診断の4項目について実験結果等を記載するとともに、アンケートを添付し、診断結果に対する感想や、今後における高齢者の安全運転講習のあり方などに関する意向把握を行った。
- ② アンケート（平均回収率 54.0%）の結果、全体的に「思っていたとおり」との回答割合が高かった。身体機能については、特に認知検査でその傾向が強いが、高齢者の5m歩行時間や非高齢者の夜間視力については「思ったより低かった」との回答割合が他と比べて高めであった。基礎運転操作に関しては、自転車と自動車については「思っていたとおり」との回答割合が高いが、自転車（非高齢者）と原付では制動時間と危険回避時間について「思ったより低かった」との回答割合も高かった。模擬市街路走行（教官評価）に関しては、自動車では信号交差点の右折を除き「思っていたとおり」の割合が他と比べて低かった。
- ③ 診断結果を見て「発進時の安全確認」「見通しの悪い交差点での安全確認」「信号機の見落とし」などに注意しようと思った人が多いことがわかった（図）。また、「積極的に身体機能の維持・向上に努めたい」との回答割合が高かった。
- ④ さらに、アンケート結果からは、高齢者を対象とする安全運転診断に対する参加希望はきわめて高く、非高齢者においても同じ水準で参加ニーズが存在することがわかった。高齢者を対象とする安全運転診断は、高齢者自身の交通安全の向上はもとより、他の交通モードや歩行者の交通安全にも寄与するものであり、今後、その効果的な実施体制作りを進めていくことが必要である。誰もが気軽に参加でき、かつ、検査・診断結果が迅速に参加者のもとへ通知されるようなシステムとしていくことが重要といえる。

図 診断結果を見て今後注意しようと思ったこと（自転車の例）

